

◆ 今週のコメント

- 急性脳炎の報告が1例あります。病原体は、インフルエンザAH3型です。本年の累積報告数は6例で、平成15年の感染症法改正により五類の全数把握対象感染症となって以降、平成21年と並び最も多くなっています。病原体内訳は、不明が3例、インフルエンザAH3型、単純ヘルペスウイルス、ヒトヘルペスウイルス6型が各1例となっています。
- インフルエンザの定点当たり報告数は、0.51(34例)で、先週から増加しています。行政区別では、山科区、伏見区を除く9行政区から報告があり、年齢別では、1歳から50歳代までと幅広い年齢層となっています。
- 伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.53(21例)で、過去5年平均値を大きく上回っています。本市では、4～5年ごとの流行周期がみられ、前回の流行(平成18年)から4年以上が経過しています。今後の動向に注意してください。
- 水痘の定点当たり報告数は、1.88(75例)で、2週連続して増加しています。年齢階級別では、2歳が19例(25.3%)、次いで1歳と3歳が各12例(16.0%)と多くなっています。

◆ 今週のトピックス: <感染性胃腸炎>

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、11.43(457例)で、本年で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O111・VT1) 1例【1月以降の累積報告数 34例】
- 五類:急性脳炎(病原体 インフルエンザAH3) 1例【1月以降の累積報告数 6例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.51	34
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	11.43	457
	② 水痘	1.88	75
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.90	36
	③ 流行性耳下腺炎	0.90	36
	⑤ RSウイルス感染症	0.65	26
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

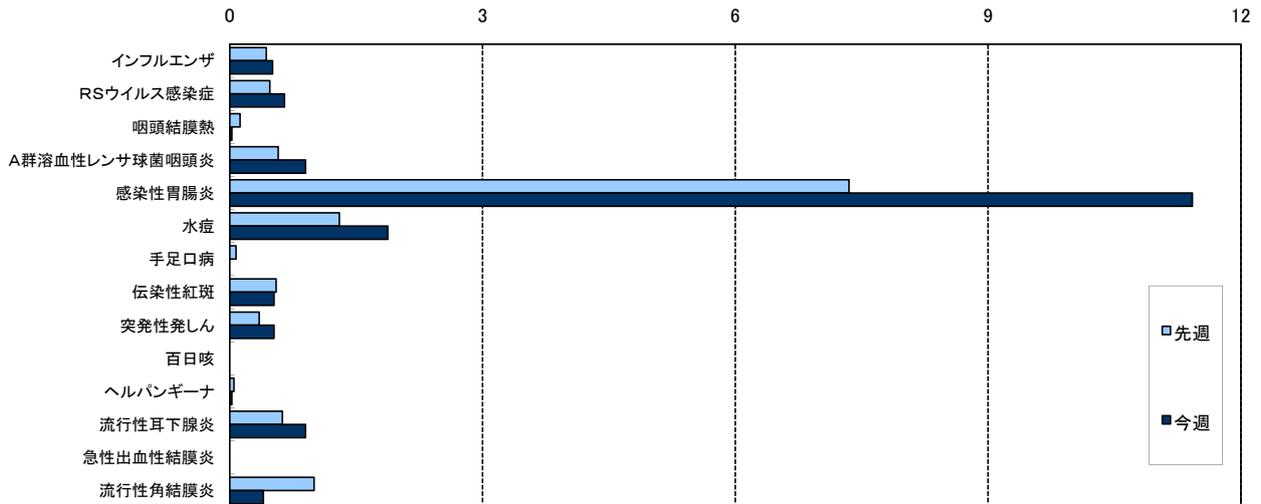
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <感染性胃腸炎>

(注)京都市のデータは、平成22年12月9日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

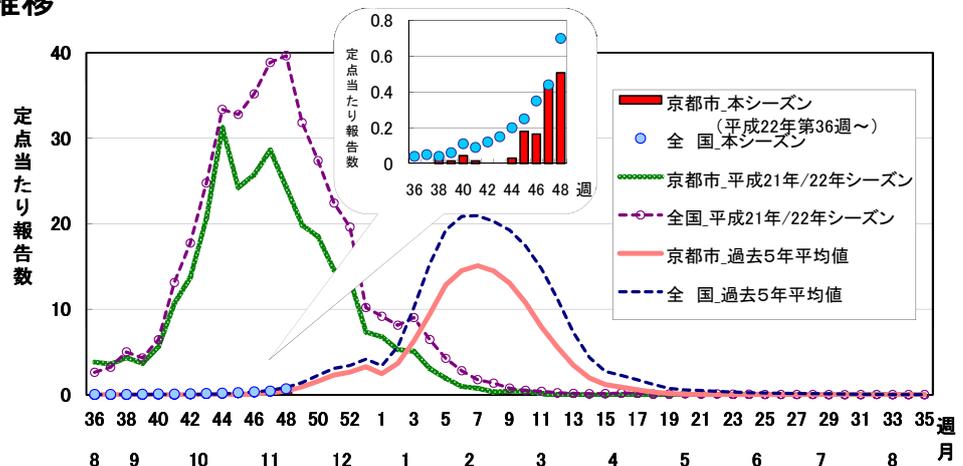
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第48週)と先週(第47週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

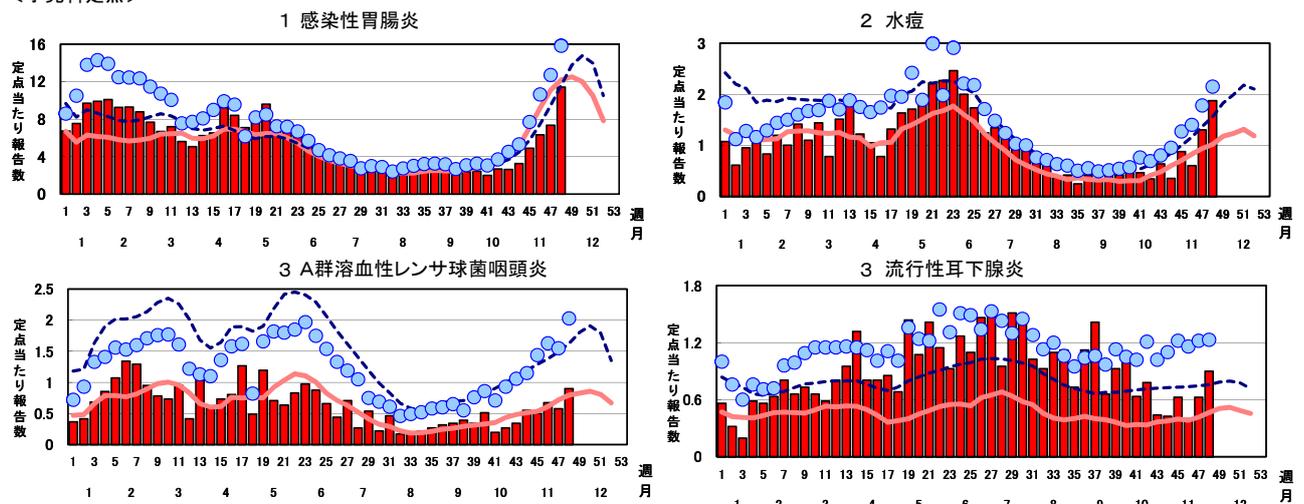
週	報告数(例)
第44週	2
第45週	12
第46週	11
第47週	29
第48週	34
累積報告数 (第36週以降)	96



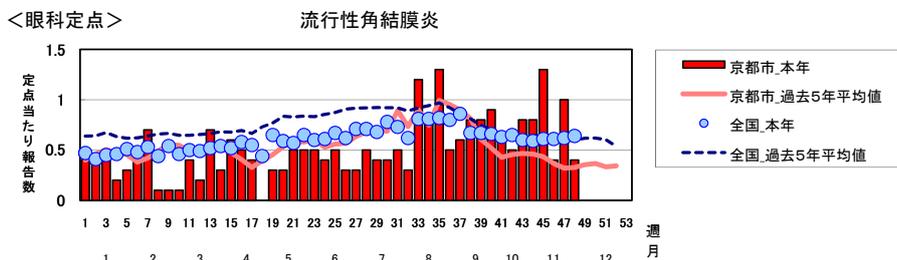
※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



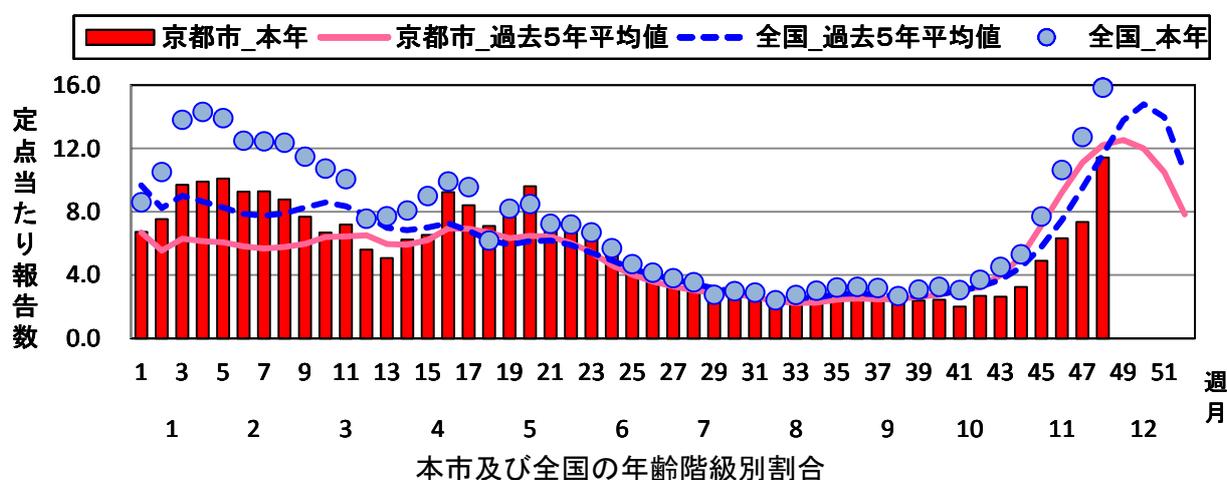
第48週(11月29日～12月5日)トピックス: <感染性胃腸炎>

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、11.43(457例)で、本年度で最も多くなっています。第43週(2.63, 108例)以降をみると、連続で増加しており、約4.5倍と急激な増加を見せています。本疾患は第50週(12月第2週)頃にピークを形成することが多く、今後の動向に注意が必要です。

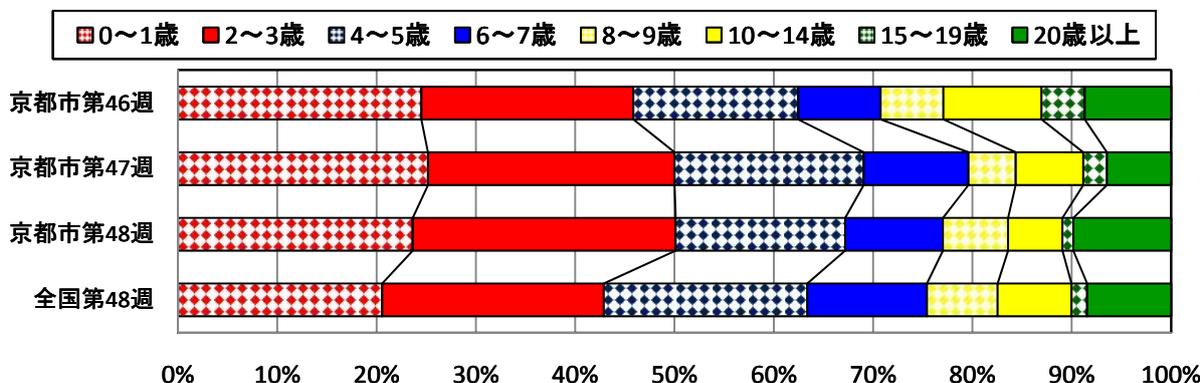
年齢階級別割合をみると、本市、全国ともに、2～3歳(本市26.5%、全国22.0%)が最も多く、次いで0～1歳(本市23.6%、全国20.6%)となっています。

近畿6府県の定点当たり報告数の推移をみると、和歌山県以外は、本市と同様に増加を続けています。ノロウイルスを原因とした感染性胃腸炎の集団発生が京都市内でも発生しており、京都市衛生環境研究所に搬入された検体から、ノロウイルスG I, G IIを検出しています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



本市及び全国の年齢階級別割合



本市及び近畿6府県の定点当たり報告数の推移(第44週～第48週)

